

氏 名	高吉 宏幸
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第505号
学位授与年月日	平成31年1月9日
審 査 委 員	主査 教授 津本 周作
	副査 教授 齊藤 洋司
	副査 教授 長井 篤

論文審査の結果の要旨

アパシーは動機づけの消失あるいは低減した精神状態である。アパシーは脳卒中や認知症、パーキンソン病などの多様な神経・精神疾患において高頻度に認められ、予後に悪影響を及ぼす。さらに、臨床的にはうつとの鑑別が困難である。こうした特徴から、アパシーの神経機序の解明と客観的なマーカーの確立が必要と考えられるが、その検討は不十分であった。本研究では、アパシーと事象関連電位の関連を検討した。動機づけへの関与が示唆される事象関連電位であるP3、刺激先行陰性電位、フォードバック関連陰性電位に着目し、これらを同時に測定できる課題を開発した。この課題において、参加者は提示された一桁の数字が5より大きいか小さいかを答え、1試行ごとにその反応時間によってフィードバックを受けた。3つの成分を惹起させる必要があり、課題が複雑になったため、本研究の対象者は若年健常者とした。弁別対象である一桁数字に対するP3はアパシーとの関連は認められなかった。一方、フィードバック刺激に対するP3成分の振幅は、若年健常者のアパシー傾向と負の相関を示しており、アパシーが強いほどP3振幅が低下していた。重要なことに、うつ、報酬依存性、新奇探索性といった類似概念とは有意な関連を示さなかった。この結果はフィードバック刺激誘発P3がアパシーの客観的指標として有用である可能性を示している。他方、刺激先行陰性電位とフォードバック関連陰性電位に関しては、金銭報酬を付加した条件においても振幅の変動が認められず、アパシーとの関連も認められなかったため、さらなる検討を要する。

本研究は、フィードバック刺激に対するP3成分がアパシーの客観的指標となりうる可能性を初めて明らかにした点で臨床的重要性をもつ研究であり、博士(医学)の学位授与に値すると判断した。